(C)河北新報社

河北春秋

仙台六大学野球秋季リーグも、東北地区代表決定戦も、優勝候補ではなかった、と元コーチのOBは驚き、喜ぶ。一戦一戦成長した仙台大が、東北勢として初めて明治神宮大会を制し、日本一に輝いた▼仙台六大学のパンフレットには206人の部員が載る。東北福祉大の133人、東北学院大の108人を引き離す。「全国でもこれほど多い大学を知らない」。退部者も極めて少ないと聞く▼OBに理由を訪ねると、公平な競争でメンバーを頻繁に入れ替える。控え選手が真剣勝負できるリーグ戦を開く。全部員に役割があり、部への貢献を実感できるよう心を配る―などを挙げた。2004年に就任した森本吉謙(よしかた)監督の方針という▼その人間性を元仙台大教授で14~17年度に野球部長を務めた高橋義夫さんは高く評価する。「真摯(しんし)な教育者。野球の巧拙では人を見ない。練習にも真剣さを求め、学べると考えている」▼優勝後の取材で森本監督は「スタンドの連中を見ると(控えで)悔しい思いをしながらあんなに喜んでいる」と目を潤ませた。部員の9割はベンチに入れない。「その9割が腐っていたら部の存在価値はない。誰一人どうでもいいと思わない」と強調した。実社会も当然「9割」が多い。多数派から見てうらやましいチームである。(2026・11・28)